

## 第九節 文化と宗教

### 一 藩 学

#### 武芸・文学第一

徳川幕府は、代々文教の興隆、学問の奨励に努めた。特に寛永七年（一六三〇）幕府は侍講林羅山に命じて江戸の忍ヶ岡に学舎を開かせて朱子学（儒学）を講義させた。これが後の昌平齋<sup>しょうへいしやう</sup>となり、やがて地方の大名たちもそれぞれの藩学、藩校を開いて家臣の子弟たちの教育を奨励するいとぐちとなつた。

小倉藩でも、細川藩時代は細川忠興の父藤孝（幽齋）は武人であるとともにすぐれた歌学の権威であり、二条家歌道の繼承者でもあつた。次の小笠原氏は源氏より受け継がれている三儀一統の道統を繼承する宗家であつた。享保十年（一七二五）十二月小笠原藩三代藩主忠基は条目を諭達し、「武芸文学第一トシ、疎略不可有之事、但文学ハ書ヲ読ムニカキラス、此儀可心得、其外芸術ハ好次第タリト雖モ、諸士ニ不似合ノ芸術ハ遠慮事」と示し、士道確立に文武の素養を重視した。学問の発達は、宝暦（一七五一—六四）前後ころより儒学の発達を招き、ついで文化年間（一八〇四—一六）より国学、特に歌道の発達をもたらした。

元文四年（一七三九）藩主忠基は学問を尊重し、林信篤の教えをうけるとともに、京都より朱子学者石川麟洲（正恒）を招聘し、禄一五〇石を給し、侍読とした。そして、更に同門の小倉藩士土屋昌英を侍読とし、豊前の儒学の振起をもたらした。宝暦二年（一七五二）十一月二十五日、藩主忠総が父忠基の遺領を継ぎ、文武の業を奨める条目を諭達し、「忠孝ノ道ヲ修メ文武之業ヲ務メ、風俗正シカルヘキ事」と示した。宝暦八年（一七五八）五月一日忠総は小倉城三の丸にあつた石川麟洲邸内に学問所を設け、藩士に子弟の就学を命じ、そしてそこを思永斎と名付けた。この思永斎が、常設の教育機関の最初で、小倉藩校の起源となつた。

『福岡県立豊津高等学校七十年史』によれば「思永とは書經卷二『皇陶曰 都 慎厥身修思永 悅叙九族庶明励翼 遷可遠在茲』（臯陶曰く都慎みて厥身修まり思ひ永く惇く九族を叙すれば、庶明励翼す 遷きより遠くすべしとは茲に在り）よりとられ、君子たるもののが万事その身を慎んでその思慮を永遠に及ぼし、ねんごろに九族に教え広めれば、人々皆その教を会得して自ら勉励し、君子の意を奉ずることとなる。近くよりして遠くに及ぼすというのはこのことであるというのであって、儒教の根本精神を意味するものである。宝暦八年、麟洲制定の講習書目を見ると、漢学中心の教育であつて、朱子学によつて武士としての教養を授け、ここに小規模ながら落ち着いた厳格な学風が生まれ、藩士の真剣な学問が始まつた」とある。

この思永斎において、小倉藩士の子弟は石川麟洲の教えをうけ、朱子学における道德、学問による武士としての教養を受けられた。思永斎の教則によれば、講習書目は四書五経、左伝、史記、三国志、文章規範な

どの二〇に及ぶ漢籍によつて学習が行われた。石川麟洲は、宝暦九年（一七五九）京都に帰省中に没した。

二〇年にわたる麟洲の教育は藩学への基を築き、そして門下の増井勝之、嗣子石川彦岳（剛）に引き継がれ、小倉藩中枢の学風となつた。麟洲の没後、忠総は宝暦九年十一月増井玄覽（勝之）に禄一〇〇石を与え、御書齋頭取を命じた。安永二年（一七七三）五月十五日玄覽に代わつて石川麟洲の第二子彦岳（剛）が御書齋頭取に命ぜられた。

その間、藩士の学問に対する意欲が高まり、従来の思永齋では手狭となり、また稽古所がそれぞれ別であることも不便であるため天明八年（一七八八）十二月思永齋を広めて武道場を併置し、名実共にととのつた藩校が設立された。これが小倉藩の藩校思永館である。

## （二）思永館（小倉）

天明九年（一七八九）一月二十二日、藩主忠総は小倉城三の丸に学館を建て、思永館とした。初代学頭には石川彦岳（剛）が命ぜられ、教則は思永齋当時のものをそのまま用いた。以下にその後の動きをまとめる。

- ・寛政三年（一七九一）小倉の文教がさかんになるにつれ、小笠原忠苗は江戸藩邸内に思永館出張所を設け、江戸に在勤する藩士子弟の教育機関として学問所を設けた。彦岳が出府して教授し、文武講習は思永館学則に準じて行われた。

- ・寛政六年（一七九四）教則の一部を変更し、習読書目を制定する。書目の中に王代一覧、本朝通鑑、日本書紀などの名が見えるのは、国史、国学の勃興を物語るものとして注目されるといわれている。

- ・寛政十二年（一八〇〇）慎文法、字試法を制定、さらに考集法を定めた。
- ・文化九年（一八二二）四月二十七日石川正蒙（彦岳の長子）に禄一一〇石を与え、馬廻格学頭を命じた。
- ・文政二年（一八一九）十一月十六日大池晋が学頭となつた。
- ・文政十年（一八二七）十月三日川江賛が学頭となつた。
- ・天保八年（一八三七）思永館焼失、次いで再建。忠固年譜に「天保八年正月四日夜戌ノ刻、小倉御城御居間ノ裏塙切場ト申所ヨリ出火、直チニ御看経所エ火移、御天守始メ、御住居向不残焼失」とあるので、この時思永館も焼失したものと思われる。翌月より城の再建工事を開始し、天保十年九月に再建されている。
- ・天保十一年（一八四〇）五月十九日矢嶋伊浜（燎辰）学頭となり、学風を刷新。
- 矢嶋伊浜は江戸幕府の天保の改革に呼応して制度を改め文武の舎を増築し、課業の法を改良するなど大いに後進の指導に力を注いだ。もともと伊浜の傑出した資質、加えて謹厳な布施晦息を起用したため、当時の江戸文化爛熟に影響されて士気憂うべき悪風がただよっていたのを刷新するため課業の法が改良された。
- ・天保十四年（一八四三）七代忠徵は、条目を改めて掲示した。矢嶋伊浜は条目の義解を作つてその意義を明らかにした。すなわち思永館御条目義解である。さらに伊浜は条目に基づき学則（習業書目、習業科目、習業期限）を改定した。なおこのころから小笠原礼法が重視された。
- ・弘化二年（一八四五）五月館内に孔子の像を安置。幕府の湯島の聖堂に倣つて孔子の像を安置して祀奠せきでんを行い、小倉の文教は一層栄えていった。

なお弘化年間、館内に医学講習所を設け、一ヵ月六回課業を実施した。また藩費遊学生一人を定めて長崎に派遣し、蘭学を修めさせている。

- ・嘉永二年（一八四九）八月布施晦息が伊浜の後を受けて学頭を命ぜられた。
- ・安政三年（一八五六）六月二十日三宅義方が学頭となつた。
- ・文久二年（一八六三）一月二十六日増井敬之が学頭となつた。
- ・慶応元年（一八六五）五月一日近藤直寅が次いで学頭となつた。
- ・慶応二年（一八六六）八月一日小倉城焼失、思永館閉鎖。

（思永館については『福岡県立豊津高等学校七十年史』参照）

思永齋、思永館が開設以来、歴代藩主によって保護育成され、また石川麟洲の子孫、および門弟らが開設の趣旨をくみとり、先師の意を体して教育にあたつたのでその隆昌にはみるべきものがあつた。明治維新前の生徒概数は五〇〇人に余るほどであつた。

こうした小倉藩の藩学の隆昌も幕末の混乱により学校経営も困難となり、さらに藩の衰運と、小倉城焼失とともに小倉藩の移動により宝曆八年以来一一〇年の歴史をもつ藩校もついに閉鎖せざるをえなくなつた。

#### (1) 思永館（小倉）の学制と構成

##### ① 教育目的

小笠原忠総以来、歴代藩主の文武の業を奨める諭達と石川麟洲、増井玄覽によつて培われた朱子学による士道確立と、幕府の示す武家諸法度を体することが目的であつた。幕末まで先師の教えを受け継ぎ、基本的精神は変わらなかつた。

## (2) 職員組織

教官として学頭（学校頭替）・頭取助役（副頭取）がそれぞれ一人、助教七人（うち一人は江戸思永館出張所に輪番交代）、武芸師範（二流につき一人）・句読師（訓導師）六人程度が置かれ、そのほかに、助教に次ぐものに講釈加勢、また句読司籍句読師（司書に相当）習字師などがあった。監督官および事務職員は、学事担当家老一人、同用人一人、學習目付一人、物書（書記に担当）二人、備品の係に小買物役が定められた。合計、教員（文学、武芸）四十八人、事務員五人、給士三人、使丁四人（日本教育史資料）。

(3) 生徒の入学資格　天保年間（一八三〇—四四）までは士分以上に限られ、その後、卒の上位にあるものは生徒控所で修学を許された。下卒の入学が許されたのは慶応年間（一八六五—六八）からで、それでも座席の上下の区別があった。卒は弓銃手共その担当の芸を師家に就いて修業し、あるいは隊長の指揮によつて坐作進退などの法を習つた。そのほか文武の芸術は私塾、寺子屋で修業した。年齢には特別の規定はないが、大体八、九歳から十二、三歳までの間に必ず入ることになつてゐたようである。

## (4) 生徒の概数

維新前では日計五〇〇人余といわれ、その内一八ないし二〇人をえらんで文学生員とし、武芸は一流につき三人の生員を選び、三年間特別の課業を命ずるとともに、師範の助勢をも兼ねさせた。

入学する場合の贈呈の礼物は、扇子箱一、生魚代として藩札壹文目を師家に、弘化二年

（一八四五）聖像安置後は、聖像に献するならわしで、維新後は廢止された。

思永斎で石川麟洲のたてた教則、朱子学を中心とした習説学科を中心に踏襲し、さらに寛政六年（一七九四）石川彦岳が、天保十四年（一八四三）矢嶋焯辰が習業書目を定めたものがあるが、これも前の書目の一部を修正したにすぎず、ほとんど同じである。天保十四年に改められた思永館御条目は、この藩校の教育方針を知るのに最も的確な資料であるが、その第一には、文武の修業および忠孝の礼節を正すことを掲げ、漢学の学習においては、孝經および四書五経の素読、大意の理解を得ることが忠孝礼儀を知る基礎であると述べている。

それに基づいて同年の矢嶋焯辰が立てた習業書目には、四書五経および孝經を基礎学習書として、その上に八五書が掲げられ、内容も儒学の根本精神の掌握から、古今の史実、政令、諸家語の研究、代表的文集の通覧など多彩にわたり、前に定められた書目より拡大される。この当方が思永館の学科内容が最も充実した時期であった。

武芸の修業は、開校以来必修の教科であつて格別に重んぜられ、そのための設備、内容も充実していた。

兵学は、山鹿、甲州、明石（海軍）、長沼の諸流を採用し、弓術（小笠原、印西、日置、竹林流）、馬術（小笠原流）、剣術（無眼、無天、今杖、新以心、三天、柳剛、一刀、真心影流）、槍術（宝蔵院、種田、佐武利流）、砲術（津田、若松、高島流）、柔術（揚心、制剛、眼心、一心、高眼、方円流）のほか、遊術も加えられており、各一流に師範、助勢として当務が置かれていた。そして上達に応じて目録、免許、印可などの等級を与えた。

## (7) 試験法

寛政十二年（一八〇〇）に定められた方法によると、学問では五条についての填文てんぶんを行う法

（填文法）二〇字についての字試法と考集法と称するものがあり、学校監督にあたる家老用人が立ち会いの上で行い、年末に優秀生に賞を与えていた。また、藩主が江戸より帰藩すると学校に臨み、自ら生員の試験を行うことがあり、さらに藩主は三年に一度、生徒大試験を執行して優秀な者に賞（書籍筆など）を与える慣わしなじみであった。

## (8) 秧

## 奠

思永館の年中行事に糀奠こびりがあった。これは弘化二年（一八四五）五月に聖堂が設けられてより行なわれるようになつたもので、慶応一年館が閉鎖されるまで続いた。香春移転後は、聖像拝礼の式を行うにとどまり、やがて育徳館にも繼承された。

## (2) 思永館の施設

## 敷地坪数

千八百五拾九坪三合

## 建物総坪数

三百三十七坪

（『日本教育史資料』、入江校長提出による）

表御門を入り右側は柔術場、その次は剣術場、その次は兵学場。左側は槍術、長刀などの稽古場、その次も武道場で、その奥に藩主着座の場がある。以上の武芸所は、犬甘兵庫在職中の建築である。表御門の真正面に思永館（学問所）の明善門がある。この門の額「明善」の二字は石川正恒先生の筆であった。明善門の前の横筋通りを左に行くと、馬術の馬場があつた。明善門を入ると、正面が学問所の玄関、それよりずっと学問所である。学問所の右に茶室という休憩所があり、夜学ではここが素読場となつた。学問所の講堂は会読場であり、学問所の奥に孔子を祭つた聖廟があつた。左右に孔門十哲の画像があり、毎年正月十七日開業

の時、生徒は皆礼拝した。表御門を入り、右に井戸があつた。左の長屋に小使部屋があり、その次に賄役の長屋があつた。茶室の脇に若党部屋があつた（松井斌二著『龍吟成夢』上）。

### (三) 香春思永館

慶応二年（一八六六）長州戦争により苦戦した結果、八月一日小倉城を自焼し、香春へと撤退をよぎなくされた。そして香春藩が誕生したのである。そのため藩学小倉思永館もここで中絶した。慶応三年（一八六七）生駒九一郎を正使とする長州藩との講和となり、休戦会談も一月に妥結調印を終わり、同年三月香春に政庁を設立する運びとなつた。当時の小笠原藩にとつて、敗戦と人心の平静を取り戻し、武力の回復と、人心の安定のためには武を鍛成し、学問の向上を図ることが復興への急務であると考え、藩校の復活に努めた。そこで武の鍛成と文事を併習させる思永館の復活となつたのである。

慶応二年四月二十日、藩は不利な情勢にかかわらず教育の整備、特に武術に必要な稽古具の整備には力をそそぎ、学頭も従来の学者を避け、武人で文事に長じた当時郡方の喜田村脩藏が登用された。

慶応三年（一八六七）五月一日に香春思永館開業が触れ出された。教則や形は小倉思永館に準じたもので、香春の光願寺を文武所に取り立て、五月四日に開学した。

しかし、慶応二年の撤退以来、小倉から避難してきた藩士たちが各地に散居していたため、その子弟の教育機関を一ヵ所に統合することは困難であつた。そのため分散した教育機関をとらざるをえなくなつた。すなわち支館が誕生したのである。

次のような「香春思永館開業触れ出」が出されている。

・五月一日触出　此度思永館の形を以於香春光願寺文武所御取建、来る四日開業被仰出に付、同五日より出席可致執業候、其余左のヶ所々々に於て文武所御取建相成候条相心得可申候、尤ヶ所々々に於て発業は追て相達にて可有之候事

但、光願寺に入學致度伺は学頭を以伺出可申事

卯五月

支館割　本庄村信福寺、節丸村阿弥陀寺、別府村法蓮寺、上赤村照福寺、田原村蓮側寺

・五月四日触出　此度支館御取建に付、左の通兩人宛箇所々々え引越被仰付候、右に付ては御時勢得と相弁万端申合、会讀素讀共別て出精可引立候。尤委細の義は頭取え承り候様可致旨助教句讀師え申渡候

支館箇所割　上赤村照福寺、田原村蓮側寺、大村瑞龍寺、木井村即伝寺、別府村法蓮寺

・七月十八日触出　先達相触置候於ヶ処々々支館發業の義、来る廿二日より其ヶ処住居の向罷出可致執行候、尤文学引立方、習書師共別紙の通被仰付候間、相心得可申事

但、本庄村信福寺、節丸村阿弥陀寺、別府村法蓮寺え支館取建候旨相触置候處、差支の筋も有之に付、別紙の通り所替致し候事

一、築城郡支館の義は、未だ出来不致候に付、追て相達にて可有之候事

支館ヶ処割　田川郡上赤村照福寺、同郡田原村蓮側寺、仲津郡大村瑞龍寺、同郡城井馬場村即伝寺

### (1) 本支館職員と教育内容（慶応三年発令）

香春思永館（光願寺）

郡方学校兼務——喜田村脩藏。助教——松室弥次兵衛、嶋田平太郎、下村虎之助（大村支館より）。

句読師——丹村国彦（上赤支館より）、吉川種次郎、外山友之輔、内藤寛太郎、浦橋与四郎。

習書師——安藤廉治。

上赤村支館（照福寺）五月一日取建触出、七月廿二日發業

助教句讀師——山田謙次郎、丹村国彦（後本館へ）、鎌田英三郎。習書師——森島麻茂留。

田原村支館（蓮側寺）同前

助教句讀師——大輪熊太郎、風間郷左衛門。習書師——稻垣宗十郎。

大村支館（瑞龍寺）同前

助教句讀師——霧嶋八兵衛、下村虎之助（本館へ）、外山友之輔。習書師——香野專藏。

木井村支館（即伝寺）五月取建、七月廿二日發業

助教句讀師——布施済右衛門、馬場久左衛門、木下文三郎。習書師——緒方丈左衛門。

本庄村支館（信福寺）

節丸村支館（阿弥陀寺）五月一日取建触出、七月十八日取建差支。

別府村支館（法蓮寺）

助教句讀師——嶋田平太郎、吉川種次郎。

弁城村支館 八月十九日取建触出 助教句讀師——浦野順之丞、白河与一郎。習書師——塩湖僕。

安武村支館 取建触出六月か、差支發業に至らぬまゝ、と思われる。 習書師——内山与左衛門。

築城郡支館 取建触出月日不明、七月十八日未だ出来不致とある。

伝法寺支館 取建触出十月か。句読師——島田勝治、白石崎右衛門。

(以上小笠原文庫「慶応三卯年小倉追書」による)

世近編 第5編 学問教育の程度は、儒学の精神を体得することによって士人の道を知るという思永館の教育目的に比すれば、はるかに低く、文字を知り、学問の一端に接し得るものに過ぎないようであった。特に、支館での教育は、本校よりも程度が低かつたのではないかと思われる。

武芸修業は、各支館の師範によつて流儀を異にするが、剣術、槍術は必修の術で、本館、支館の試合などで士気を高め、その上達を競わせた。

## (2) 思永館の終焉しゅうえん

香春思永館は、長州戦争による変動と、それによる藩財政窮乏、藩士の居住分散のため大規模な学舎は望めず、支館の設置という結果になつた。しかし、藩の再興には、まず教育という理念をかかげ、藩政が教育に重点をおき、重臣挙げて藩校復興に奔走した熱意は敬意を払うべきところである。そして、このことが、その後の教育意欲を高める上で大きく貢献している。

慶応四年(明治元年)十一月、仮御殿御造営についての場所を決定する投票を行い、錦原(現豊津)が一〇〇票中四八票を獲得して決定した。香春藩庁は、小倉藩変動後の仮庁舎であつたので、ここに恒久的な御城地としての決定をみたわけである。直ちに家老小笠原内匠以下錦原御地所を見分、中央一〇〇間四面を繩張りし、御地所御祈禱、御鉄建を行つた。そして藩庁と文武館用地の地均し作業が開始されたのである。

文武館については、「文武学校ヲ豊津ニ新築シ、皇漢洋三学ヲ並用ヒ、旧習ヲ一新スルノ制ヲ施シ、生徒

ヲ勉励スルノ法ヲ設ケ、以テ振起スルノ風ニ向ハシム」とし、これまでの思永館の館名も新たに育徳館とした。思永館の終焉である。

## 二 私塾教育

### 塾教育の特色

私塾は、武士階級だけを教育した藩学に対し、階級的差別なく、塾主の学徳を慕う向学の人間に門が開かれ、塾主の信念による学風や、独自の教育精神によつて樹立されたものが多くの藩政時代の民間教育機関であった。

塾教育の特色として、三つの類型が考えられる。その一は、その国の藩校との関係が強いもの、その二は、逆に藩校と無関係に独自の立場を固守した塾、その三は、藩にことさら対抗するのではなく、全然無関係に、郷土および人間の育成に主眼をおき、名利をはなれての純粹な教育を目的とした塾である。

豊前においては、上毛郡の小野原善言の塾が、その二にあたるのではないかと思われる。小野原善言は、日田から江戸および水戸にまで遊学して会沢正志斎に就き、この地方では珍しく水戸の学風を唱導した人であつた。孝悌報恩の教えを布くことを以て天職とし、小倉藩校の教職を退いてからは、郷里八田村小野原山中において私塾を開いた。藩に忌避されながらも、その教育熱は強く、屈せず、明治元年（一八六八）、小笠原支藩の郷校が築城郡越路村に建てられてからその督学となり、翌年郷校廃止後、再び塾教育に尽くした。そして、その三の類型として豊前においては、村上仏山の水哉園、恒遠醒窓の藏春園、および各地の日田